白い手紙

小坂戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白い手紙

【Ｎコード】
Ｎ５５３５Ｆ

【作者名】
小坂戒

【あらすじ】
共作です。構成：雪鈴るな。。婚約者に別れを告げられた直也は交通事故で瀕死の重症を負う。生死を彷徨っている時に、この世の者とは思えない美しさを持つ理恵に出会う事になる。

オープニングソング（前書き）

歌詞の文字数：英和含めて約４５０文字です。
下記のアドレスは、ダウンロードに光回線１００Ｍｂｐｓで約3分
かかります。
携帯の方は画像をご覧頂けないのでご了承下さい。

オープニングソング

「火の川」小谷美紗子

ｈｔｔｐ：／／ｊｐ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ｆ１ｐＸｐｗｙＧＬｉＵ

赤い目をした子うさぎが
横たわる私を恐れず
私から抜けて行く者を
じっと赤い目の中で動かしてる

あなたが他の人のものに
なって行くのを見つけたって
出来る事は何もない
それでも元には戻らない

これは現実なのさ
地の果てから来たのさ
赤い火の川
さぁ　逃げなさい

私たち粉々になったよ
あなたといる自分が嫌いだったよ
夏が置いていった空き缶の様に
夢をほったらかしにしてたよ

同じお墓に入りたい
“ずっとずっと一緒”だって

あなたのその言葉だけで
何があっても前進できる

赤い火の川
地の果てから来たのさ
出来るだけ遠くへ
さぁ　逃げなさい

あなたをも巻き込んで海へ
力尽きるまで流れて
赤い火の川となった私を
海が止めてくれるでしょう

私たち粉々になったよ
灰色になって飛んで行ったよ
私に残されたものは
効かなくなった永遠の約束

地の果てから来たのさ
赤い火の川
出来るだけ遠くへ
さぁ　逃げなさい

私たち粉々になったよ
灰色になって飛んで行ったよ
私に残されたものは
効かなくなった永遠の約束

あなたをも巻き込んで海へ
力尽きるまで流れて

夏が置いていった空き缶の様に
海にも嫌われるのよ

第一話

たった一言で終わらされてしまった。
僕にはそれだけの価値しかないのだと宣告されたようなよう気にさえなる。
それに彼女の部屋からここまで歩いてきた実感をなくしてしまうほどに朦朧としていたのだと思うと自分がとても矮小なものにさえ思える。
自分でさえもそう思えるのだから他人にとっては尚更なのだろう。
そう考えれば多少は自分を納得させる事ができそうな気もした。

もういいか。
それでも、ずっと考えながら歩いていた挙句に結論がそんな程度だった。
ただ単に僕が救いようのない馬鹿だっただけなのだから。
だけれど、どうしても不可解だ。
僕の頭が悪いだと。
今の僕を分析してみたとすれば確かに頭が悪い奴なのかもしれない。
そんなに僕が屑でどうしようもないからなのか。
一度は、いや何度もあの女と結婚したいと考えていた、自分をとても情けなく思う。
実はこんなに情けない人間の僕が結婚をしたいなどと考えるのがそもそも思い上がりだったのだ。
いまはそんな考えばかりが飛来し、自分でも気づかぬ間に身体は家への方角へと歩を進めていた。
まさしく、直線で。

音が聞こえた時は既に遅かったと思う。

もしかしたら、聞こえていたけれども委ねてみたくなっていたのかもしれない。
音の方向、光さえ見ていなかったのだから、僕にとってはただぶつかられた感覚しかなかった。
その後に律儀に運転手が救急車を呼んだようで、運ばれたりしたり、人工呼吸やらをされたのだと思う。
そのへんの記憶はどうも曖昧だ。
だけど、不思議に確信があるのは、その時に僕は死んでいたということ。

第二話

誰かに足と腕を掴まれ車から降ろされようとしているのが分かった。
意識はぼんやりとしているが言いようの無い恐怖を感じる。
だけど、自分の意思で指程度しか動かせない身では何も表し様はない。
その時はただ歯痒くて、いっそ死んでしまいたいとさえ思ってしまっていた。
忘れていた苦痛が再びやってきた時、考えは全て消し飛び、僕は意識を失った。

人の声、再び他人に身体を触られる不快感で意識が少しだけ冴えてくる。
目を開けると医者が僕の体に馬乗りになって心臓を叩いているのが見えた。
叩かれる度に僕の身体は跳ね上がる。
自分の身体のはずなのに、殆ど実感が無い。
少し前までは触られている感覚だけは残っていたのに今はもう自分の身体を忘れてしまったような気さえ起こる。
その後すぐに、自分の体以外の全てが上に引っ張られていくような感覚に襲われた。
上を見やるも、何も見えない。
それでも、どこか高いところへ連れて行かれるような感覚に恐怖を感じる。
視線を下に向けると、やはり自分の体があった。
焦っているはずなのに、これが死ぬことかと考える自分がいるのがどこか可笑しい
死にかけた人っていうのが同じ様な事を言っていたのを思い出し

たから。
可笑しくて、情けないくらいにパニックに陥っているけれど、僕は死にたくはない。
必死で掴める物を探すために手を延ばす。
壁も、柱もスチール製のパイプも何も掴めない。
幽体離脱という言葉がやっと思い浮かぶも、僕の知る幽体離脱はもうちょっと何か出来た気がする。
荒涼とした何も無い世界、それはいいとしよう。
でも、夢遊病者のようになった挙句に自殺したとされてはたまらない。

ふと、暖かい空気に包まれた気がした。
自分の体以外の部分が何かに包まれている感覚は懐かしい感じがする。
上を見ていた目をそちらに向けると、黒い衣服の若い女性が僕の腕を抱えていた。
僕は何を考える事もなくその女性の身体にすがる。
不思議に生々しくも肉感的な感覚だった。
もしかして、その服一枚だけなのか。
その女性の顔の在るらしいほうを見ると、その身体にとても似合った顔があった。
綺麗でどことなく犯しがたいような顔が。
だからと言うのではないと思うのだけど、僕は思わず変なことを口走っていた。
「こんな綺麗な女性は今までに見たことが無い」
死にかけていたのに下卑た事をしたものだと思う。
それだけこの女性が魅力的だということなのだろうか。
引っ張られるような感覚が消えていき、足が地に着いたような気がした。
とても安心したような、勿体無かったような気分をかみ締めた後

に目の前の女性を見つめる。
女性は幻影ではないというように僕の目を見つめ、はっきりと微笑えむように口角を上げる。
その表情も素敵だと言いそうになった。
目の前の女性は神秘的という言葉が何よりも似合う。
綺麗なのは容姿というよりその雰囲気が。
そして、その身に着けている黒いイブニングドレスもとても良い。
「本当に綺麗だ」
「もしよかったら、私と一緒に暮らしませんか？」
僕のたわ言を一蹴し、初めての言葉が彼女から返される。
しかも、それは今の僕にとって凄い内容だった。
そのことに何よりも驚いてしまい、内容を理解する事はできなくなっていた。
「一緒に暮らさないなら、私はあなたを掴んでいる手を放します」
遅れて、理解する。
今、選択する必要があるのだと。
だけど、目の前にいるのは人間ではない気がする。
彼女にはどこか、絶対に異質な雰囲気を感じる。
「どうします？」
浅はかなことに女に別れを言い出され、今度はこの世の者とは思えない美しい女性から一緒に暮らさないかと誘われている。
一体何が起きているのか。
よく分からないが、これだけは言える。僕は生きたい。
出来ればこの女性と。
「僕でよければ一緒になって頂けませんか？」
僕自身を救うために僕はこの女性を必要とすることに何の疑問も抱かなかった。

第三話

誰かが僕を呼んだ気がした。
気のせいで済めばいいと思ったのは、もう少し本当に一人で居たかったからなのかもしれない。
でも、そんな都合いいようにはならない。僕の名前は実際に呼ばれていた。
「直也、起きてるの？」
同時に肩を揺さぶられる。
車に轢かれた重病人に何という扱いをするのか。
無視してやろうと思うも何ともしつこい。
「直也、もう起きてるんでしょう」
さらに身体全体を揺さぶってくる。
我慢も限界に達し、普段よりも声を荒げて止めさせる。
「うるさいよ。それに鬱陶しい」
折角声を出したというのに、なぜか返事の変わりに肩を叩かれる。
「やっぱり、生きてたんだね」
「医者がそう言ってたんだ。勝手に殺してやるな」
薄目を開けて確認すると、やはり両親だった。
「目は見えてるの？」
「医者の言葉を忘れたのか」
答えるより前に父親が言葉を挟んでくる。
「見えるよ、ちゃんと。多分だけど、視力も落ちてない」
口が先に言葉を紡いでしまったけど、実際に良く見える。
それに耳も悪くなっていないし、言葉もつかえることが無い。
「本当に良かった。生きていただけじゃなくて何処も悪くないなんて」
「何処も悪くないかはまだ分からんよ」
父親を無視して母はどこか浮かれ調子のまま僕のほうに身体を近

づける。
「生きていても、目も見えない耳も聞こえないじゃ理恵さんが気の毒でしょ」
「理恵って誰かな？」
途端に両親の顔が引きつる。
「頭を打ったとは聞いたが記憶も飛んでしまったか」
あまり動じた様子が無いのは父親だが、母は顔を覆ってしまっている。
いつも見ていた光景なので、気にする事はない。
だけど、理恵って誰なのだろう。

「じゃあ、私達は行くわ。もう少ししたら理恵さんが来てくれるそうよ」
一通り、心配するフリをした後ににこやかにそう告げて帰っていた。
聞きそびれたままになりそうだったので、僥倖に思えて仕方が無い。
ただ、待っているだけで向こうから来てくれるなんて。

「こんにちは、一応初めましてですか。理恵と言います。上橋直也（かみはしなおや）さんですよね？」
病室に来るなり、僕に一礼し、中音域の声を出した。
「あなたは僕が死に掛けている時の」
「ええ、そうです。でもあなたではありませんよ、理恵です。前は条件のことを伝えてませんでしたので伝えにきました」
「あの時のことは本当だったんだ」
「ええ。本当です」
何か言い返そうと思ったが、理恵がカバンの中から取り出した封筒に気を取られてしまい、言うタイミングを逃してしまった。
「早速ですみませんが、この書類にサインをいただけると幸いで

す。判子はご両親からいただきましたので気になさらず」
彼女が差し出した紙には婚姻届とあった。
「どうして、っていう疑問でしたら、夫婦になるためですとお答えします。だから、書いて下さいね。勿論、直也さんには治療に専念してもらって、届けは私がします」
僕が言おうとすることが先に言われる。
「あ、でも。条件と言うか、契約があるんです」
聞きたいことは他にもあったが、さしあったて気になることから無くそう。
「その契約って？」
目の前の彼女は楽しそうな声で続ける。
「契約というのはその結婚生活のことなんですけど、２２時から０時までの行動には絶対干渉しないでください。勿論、付いて来たりしてもいけません。それと、白い手紙。つまり私の持っている手紙に絶対に手を出さないで下さい。それと、私の仕事に関しては何も質問しないで下さい」
「それは守らなければいけないのかな。そもそも君と結婚して僕に何かいいことがあるの？」
「さっきも言いましたけど私と夫婦になれます。仕事も私がします。直也さんには家事をしてもらう事になります」
仕事をしなくていいというのは、入院して動けない僕には魅力的な条件だと思う。
だけど、この妖しい女の言い分を信用するのは危険な気がする。
「少しだけ考えさせてもらってもいいか？」
目線を下に向けた時、柔らかい何かに包まれる。
「いけません。私は直也さんとどうしても結婚がしたいです。直也さんは私の事が嫌ですか？」
前の彼女と別れてからそう時間は経たないはずなのに、久しぶりに感じる温みが心地よかったのか。
あまりにもいきなりの事で、心構えも何もできていなかったため

か。

「綺麗な君との結婚が嫌だなんて、思ったりしないよ」

僕は気づかないうちに理恵と結婚すると頷いていた。

第四話

何の力が働いたのかは明白ではないが、医者が言うところでは僕の怪我はほぼ完治するような物らしい。
車に真正面から轢かれたのに不思議に思うのだが、理恵のことを思えば別段そうでも無いような気もする。
とりあえず、喜んでおくことにした。

「こんにちは、直也さん。ご気分は如何ですか？」
昨日、情けないところを見られてしまったので多少気恥ずかしい。
「どうしました、直也さん。照れてるんですか」
肯定など出来るわけがない。
それに肯定するより聞きたいことがある。
「僕の名前を呼ぶことが多い気がするんですが、気のせいかな」
「気のせいなんかじゃありませんよ、直也さん。忘れてしまいましたか。私は貴方の奥さんなんですよ」
理恵はそれが常であるかのように穏やかに微笑む。
「まだ実感が出来ないな。でも、嫌なわけじゃないよ」
「分かってます。直也さんは嫌だなんて言えませんものね。けど、決して嫌な思いはさせませんから」
穏やかな顔のままで諭すような口調で告げる。
顔だけだと二十歳くらいにしか見えないのに、雰囲気や表情はまるで子を持つ母親のようだ。
どんなことを経験すればこんな風になれるんだろうか。
知りたいと思う。
そして、その思いは多分理恵への独占欲に違いないのだろう。
「直也さん、分かってますか。もう直ぐで直也さんのご両親が来られるそうです」
「今、何て？」

考え事のせいで聞き逃していた。
「あと１０分ほどで直也さんのご両親が見えられます」
「昨日も来たのに。でも、何しに来るんだろう」
「親というのは子供が可愛くて仕方が無いものなんですよ」
だから、と理恵が可笑しそうに言う。
「可愛い息子が選んだ人を観察したがるものなんです」
「そうかな。でも、どうして結婚のことを知っているのかな。確か、結婚が決まったのは昨日だった気がする」
「正確に言うと二日前です。憶えてますか、直也さんが結婚しようと言ってくれたんですよ」
よく憶えていないけれど、そんな気もする。

「ありがとうね。直也の面倒を見させてしまって」
「いえ、構いませんよ。私達は夫婦なんですから」
「あら、仲良しなのね」
女二人でもうかしましい。
会話に入れないのか父が僕の方に顔を寄せてくる。
「本当に良かったな。あんな人が嫁さんになるとは、羨ましい」
「年甲斐が無いな。もうちょっと違うことは言えないのか」
この親父は下卑ているけど普通だと思う。
母親も決して何か大事なものから外れてはいない。
だけど、僕と理恵は何かおかしな所に足を踏み入れているような気がして仕方が無い。
いつもの癖で考えに浸っていると、また話を聞き逃した。
一体、何を話していたのか。
「心配は要りません。私が直也さんの代わりに働きますから」
やはり、しっかり話を聞いておくべきだった。
「でも、そうだと理恵さんがしんどくないかしら。子供が出来るってこともあるでしょうし」
「それも大丈夫です。ちゃんと計画を立てますから」

理恵の言葉を聞いた両親が、二人合わせて僕のほうを見る。
言葉も無く目だけが告げていた。
罪深い男だな、と。

第五話

そろそろ入院生活に飽きてきた。
神経質そうな病室の色も、食堂の喧騒も、夜中の静まり返った感じも。
身体は殆ど治ってきているそうなので、いい加減外泊くらい出来ないものかと考えるも外泊よりは早く退院したい。
そう思うことは決して悪い事なのではない、と思いたい。
特に退院してからの未来が楽しみで仕方が無い。
両親と暮らしていた部屋は引き払い、理恵の部屋に引っ越して、しばらくはそこで蜜月を送る予定になっている。
仕事も理恵がやってくれる。
僕がやることは家にいることと、食事を作る事、他にも掃除、洗濯などはあるが雑事に過ぎない。
男なのにそれで良いのかと考える事もあるけど、それ以上に理恵との生活に思いを馳せて自分でも恥ずかしくなる事を考える事がほとんどだ。
楽しいのだから、仕方が無い。
本当に僕は罪深いような気がする。

理恵は毎日来てくれる。
仕事の事を尋ねても何となくではぐらかされてしまい、知らないままだ。
此処の入院費は両親持ち、というより僕の残された少しの財産を当てたみたいだけど、足りない分はどうやら理恵が出してくれているらしい。
会って間もないというのにこの献身ぶり、理恵という女の本性なのか、それとも他に何か目的があるのかと疑いたくもなるというものだ。

疑っても仕方ないし、理恵に対してそんな感情を抱くのは良くない気がしたので考える事はもう止めた。
「また、意識がどこかへ飛んでましたか。あんまりボーっとしてると格好悪くなってしまいますよ」
僕の身体に手を置いたまま、声をかけてくる。
理恵は毎日来るたびに、律儀に手を僕の身体に置く。
３０分だったり１時間だったりと時間に差は有るものの、理恵はそこに手を置くとしばらく動かなくなる。
会話ぐらいはこなせるようだけど、意識は手のひらにいっているとしか思えない。
この時間に理恵から話しかけるのは珍しいので僕はそのままを理恵に言うと、いつもと変わらぬ穏やかな顔で返してくる。
「手のひらを乗せるだけではいけないんです。ちゃんと気持ちを集中させて触れるからこそ直也さんの身体に届くんですよ」
僕の身体に届くというのは誇張ではなく、理恵の触れた箇所は僕の感じる限りでは確実に回復していた。
理恵はやはり、普通の女性ではないと怖さを感じる事もあるが、目の前の温かそうな理恵の存在を否定するような気は起きない。
「もう少しですよ、直也さん。近いうちに私達の家に帰る事が出来ます。私、本当に楽しみにしています」
そう穏やかに言う彼女の顔は言葉と同じほどに穏やかな笑みを浮かべていた。

第六話

僕にとっての入院生活とは、つまり禁欲生活であった。
ただ白い部屋を日がな一日眺めている事を強制させられるのは拷問以外の何もにも感じられなかった。
病室での理恵とのふれあいが決して嫌いだったわけではない。気が急いてしまうというか、さして多くない荷物を持って手早く新居に運び入れ美しい理恵と名実共に夫婦になりたいと思っていた。
でも長い長い我慢の日々もいつかは終焉を迎える。彼女のお蔭で、僕は2週間ほど早めに退院する事が出来た。
引越しついでにしっかり礼を言っておかなくてはいけないと思う。

「こんにちは、直也さん。荷物はもう届いてますよ。でも、業者さんに頼むほどの量でもありませんでしたね」
扉を開けるなり、常の穏やかな声で迎えてくれる。
「意地かな。それに自分で持ってくるにはちょっと多い気がしたから。それにこの足も」
病室で理恵が懸命に手で触れてくれたためか、怪我は驚くべき速さで回復していったのだが左足だけはどうしようもなかったらしい。
理恵が一番長く触れていた部分が左足だったので、その頃から何となくだけど予感はしていた。
左足が思うように動かないのは不便だけど、そんなに気にする事でもないように思えてきている。
せめて、痛みだけでも失くそうとする理恵の献身的な態度を見てきた僕がこれ以上厚かましくなるわけにはいかない。
そう思うことは理恵への愛情なのか。

本日の夕食は理恵の手作りだった。
僕もこれから食事を作らないといけないので、理恵から調理方法

を聞きながら手伝いをした。
理恵は僕が失敗しても優しかった。注意する時の声が色っぽい艶となって僕の心に響き、「こうするんですよ」と僕の手に触れて来た時は、僕の心臓の鼓動は早くなった。
理恵の味付けは文句なしに美味しいもので、退院祝いということで買った少し高めのワインと非常に良く合っていた。
ほろ酔い気味の頭で先にシャワーを浴び、理恵が入れ違いに浴びている間にビール缶を一つ空けた。
一緒に料理をしていた時は興奮していたが、いざ寝る時を向かえると我ながら可笑しい事に緊張しているらしい。
缶を持つ手が小刻みに震えている。
このまま寝るのもいいかもしれない、退院したばかりなのだし疲れている、と弱気な考えが起こったりもする。
興奮のせいか、それとも安酒だったせいか味など良く分からなかった。
ただ、腹の中が熱くなっていく感覚だけが心地よかった。

あれこれと考えるのにも飽きて、酒も切れた頃に、浴室の扉が開いた音がして理恵が出てきた。
理知的、そんな言葉を忘れたかのように駆け寄って理恵を掻き抱いた。
彼女は何の抵抗も示さなかったと思う。
ただただ、僕を穏やかな目で見つめていた。
反して、僕は必死で穏やかな理恵を崩してやりたくて血管が沸騰するようだったけれど、結局気づいたときには横で理恵が寝息を立てていた。
しばらくその顔を眺めながら寸刻前の自分を思い出してみるが、情けなくなって止め、理恵の額に手を延ばす。
今、気づいた。
理恵の額はとても美しい曲線を描いていて、触った感じもしっと

りしていた。
僕はこの女が好きなのだろうか。
「どうしました。眠れませんか」
僕の髪に触れながら、頭を抱きかかえる。
「ゆっくり休んでください」
身体を包まれて耳元で呼吸が聞こえるためか、僕は凄く脱力してしまい、瞼が上がらない。
「おやすみなさい、直也さん」
おやすみ、とも言えないまま眠りに落ちようとする刹那、理恵の後ろに時計が見えた。
時刻は２１時５２分。

第七話

僕は結構なことに幸せだと思う。
人間関係を円滑に進めるのに大事なことは相手に深く立ち入らない事と、自分を上手く納得させる事だと何かで読んだことがある。
僕は全くその通りだと実感した。
理恵のどんな時も崩れない穏やかな表情の理由も、どこで働いているのか、僕のことをどう思っているのか。
どれも気にしなければ生活を順調に送れることがわかったのだから。
矜持や猜疑心などはどこかに押しやる事ができるものなのだ。

「明日から連休だけど、予定は無いのかな？職場の同僚で仲のいい人を誘ったりとか」
理恵の仕事についてなんとか聞き出せないものかと策を講じてみたが慣れない為か言葉が非常にぎこちないのが自分でも分かる。
「いませんよ。職場の方はみなさん、お忙しいんです。それに、他人といるよりは家族でいる方が私は好きですよ」
そう、とだけ答えて僕は考え込む。
あくまで、僕の勘では理恵は普通の会社には勤めていない。
帰宅してくる彼女には仕事帰りの雰囲気が感じられない上に、世知辛さというのを全く知らないように思える。
それなのに、理恵は近所のスーパーで食品を買ってくるし、家賃だって払っている。
そのことが不可解で仕方が無い。
悩んでしまうことは理恵を信頼していない事になる。
決して信頼していないわけではない。
だけど、その秘密が僕にとっても関係のあるものなのだから気になってしまう。

気にしてはいけないことは百も承知なのだけど。
「直也さん、どうしました？また、考え事をしてましたね」
知らず知らずうつむいていた顔を上げるとそこには理恵の常の穏やかな顔があった。
「どうしようもないこと以外なら、私に話してくださいませんか？」
約束を破る事はどうしようもない事なのだろうか。
少なくとも、理恵が何も答えられないだろうということぐらいは分かる。
僕は理恵の顔に手を伸ばし、表情だけは穏やかで、でも少しだけ潤んでいる瞳を抱き寄せる。

気にしないことで幸せを得られるのなら、甘んじて受け入れることを選びたい。
理恵を好きなだけ抱いてからいつものように意識を失った。
本当にいつもの通りなら僕はそのまま朝まで眠ってしまう。
たまたま、起きた僕が横を見ると理恵がいなかった。
不思議に思って、部屋を出てみると明かりも何も無い。
理恵はどこへ行ったのか、眠いけれどあと少しだけ探そうと思い、部屋の中を回って見る。
トイレにも、キッチンにも部屋にも理恵はいなかった。
最後に玄関に行くと、何の変化も無いように見えた。
あまりの眠たさに部屋に戻りたい、だけど、何かがおかしい。
玄関の鍵がかかっていない。
「無用心な」
鍵を閉めようとすると、とつぜん真っ黒な影が入ってきた。
その影は僕に気をとめることも無く奥へと進んでいく。
慌てて、人の形をした影に手をかけ、こちらに身体を向かせる。
それは正しく人で、顔もあって、目もあって、口もある。
どれもが良く知った形であるのに、僕には分からなかった。

なぜなら、そのどれもがあまりに無感動に存在していたから。
「理恵」
聞こえないフリをしていたのかしばらくすると、顔を上げる。
そこにはいつもの穏やかな顔があった。
「直也さん、夜も遅くなりました。早く休みましょう」
ああ、聞こえないはずの溜息を漏らし寝室へ戻る。
布団にもぐりこみ、目を閉じる前に時計を一瞥する。
午前0時2分

第八話

理恵の豹変、それに加え何事も無かったかのような口ぶりが余りに恐ろしかったのもあって、僕はベッドに潜り込んで何も考えるなと念じながら目を閉じた。
目を閉じると、世界はさらに暗くなってしまう。
だけど、瞼の裏には色々な物が浮かんでしまう事がある。
理恵を影と捉えてしまったのは彼女があの黒いイブニングドレスを着ていたからではないのか。
そう考えると、間違いないように思えてくる。
理恵の肌は暗闇の中でも青白く見えるのだから、それを遮るのは黒い服しかないのだから。

あまりに考えすぎたせいか、起きた時には8時を回ってしまっていた。
昼食以外は理恵の担当とはいえ食事を作らせて平気な顔が出来る様にはなりたくないと、思っている。
不自由な左足の事を考えると、昨夜の事など薄れるほど自分に情けなさを感じた。
「直也さん、どうしました。お体が優れませんか？」
「寝すぎただけだよ。悪いね」
言った側から笑ってしまいそうになる。
「朝食が出来てますよ。早く来てくださいね」
生返事を返し、理恵が出て行く。
その後、口角が吊り上ってしまうのが止められずに床に倒れこんで声を抑えて笑い転げた。
理由はないと思う。
ただただ、飼われているペットのような自分が可笑しかった。

朝食を共に食べ、昼まで何を為すことも無く過ごし、昼食は外で摂った。
その後、近くのスーパーで買い物をし、理恵がブーツが欲しいとばかり言っているのがほほえましかった。
その日の夕食は僕の担当だったけど、それはただの名義でいつも理恵に手伝ってもらっている。
海老の調理をする時に僕がすることは話す事と、殻をむくこと、後は茹でるくらい。
つまり、僕の生活に理恵がいることはもう疑いようが無いほど当然の事になっている。
「これが夫婦っていうことなのかな」
「何か言いましたか？」
「ううん、ただの独り言」
そう、と返して理恵は火の加減を気にしている。
僕は皿の用意をしている。
夫婦として。

夕食を終え、二人して風呂に入ってから抱き合う。
左足の不自由な僕は理恵に嫌われてやしないだろうか、と思うも始めだけで、後はただ理恵に溺れていくいつもの営みになった。
ただ、本当にいつもどおりなら僕はそのまま寝付いてしまう。
それが今日はよほど意識する事が出来たのか、夜のうちに起きる事ができた。
時刻は２１時５６分。

理恵の部屋に向かうと、僅かに衣擦れの音が聞こえる。
緊張してしまって心音がうるさい。
と、部屋の扉がゆっくりと開いた。
キッチンの影に隠れて見ていると、真っ暗な中にでも理恵の青白い顔が浮かんで見えた。

身その表情は昨日と同じ。何も感じていないような顔で、背中に汗が這っているのが分かった。
身に着けているのは黒いドレス、おそらく初めて会った時のイブニングドレスだろう。

理恵は玄関へと向かい黒いヒールを履き、扉を開けて鍵を閉めた。
僕はしばらくしてから、外へ出て鍵を閉め理恵のあとをつけた。
エレベーターが降りたのは1階だったので、足音を殺しつつすぐさま降りて、外へ出る。
エントランスから少し離れたところに、真っ黒な理恵と真っ黒な男の影があった。
人のシルエットが分かるぎりぎりの暗さで見える。
そして、男の影が黒い理恵に差し出した白い手紙が何よりも明るく見えた。

第九話

黒い影は僕の目にはとても不吉なものに見えて、それが動くたびに見つかっているのではないかと心臓がうるさいほどだった。
うるさい、うるさい、うるさい、うるさい。
おまけに汗が背中に張り付いて気持ちが悪い。
そのくせ寝巻きのまま外に出たので寒気も感じてしまう。
引き返したくなったのか、自分の部屋の方を見上げて嘆息する。
どうして、僕は寒い思いをして気持ち悪いのに外に出ていなければならないのだろう。
じっくりと、見上げてから理恵のいる方を向くと、誰も居なかった。
とても安心した。

部屋に戻り、0時までまんじりともせず明かした。
あの病室で、理恵に言われた22時から0時までは不干渉であること、ということが今更だ　がひっかかりはじめた。
どうして、理恵の仕事がこんなに遅くでないといけないのか。
詰まるところ、見られて困るような事なのだろうけど、今の僕にはそれに干渉する気などはない。
理恵に問い詰めたところでおそらく何も教えてはくれない。
それに、問い詰めた事で理恵が僕から離れていってしまうかもしれないという想像が何より怖かった。

扉を開く音、それに靴が奏でる高音が響いた。
朦朧としていた意識を覚まし、ソファから起き上がる。
近づいてくる真っ黒な影を認めて声をかける。
「おかえり、遅かったね」
「ただいま」

理恵は、いつもの理恵で薄闇の中でも穏やかな顔をしているのが分かった。
「どうしたんです。ちゃんと寝ないとしんどくなってしまいますよ」
理恵が壁際のスイッチを入れて、やっと部屋が明るくなる。
「なんだか、眠れなくてね。それに理恵がいないから肌寒いのもあった」
「そんなことを言ってもらえるなんて嬉しいです。でも、珍しいですね。直也さんはいつも気持ちを伝えてくれませんもの」
僕の隣に腰掛けて、身を寄せてくる。
「一応、夫だから。理恵のことは愛しているし、心配もしているんだ」
「ごめんなさい、何も言えなくて」
構わないよ、と言うも、表情には何かが表れていたと思う。
「桜木さん」
もう、寝ようかと言いかけた矢先に理恵が呟いた。
「何でもありません。さ、寝ましょうか」
「そう、だね」
桜木とはあの大きな影の名前だろうか。
あの影が桜木、全く似合わない。
真っ黒で大きな影の癖に桜木とは。
「どうしました？」
顔を向けると理恵が目を丸くして僕を凝視している。
なんでもない、と言って理恵の体を抱き上げて寝室へと移動する。
自分が足を痛めていたことをその時に思い出し、幾度か顔を引きつらせてしまったかもしれない。
だけれど、それよりも抱きしめた感触があまりに柔らかかったのが気になった。

第十話

恐れか、不安か、それとも嫉妬なのか。ぐちゃぐちゃの気持ちのまま抱いても理恵は変わらずに穏やかで、とても柔らかかった。
それが僕を余計に荒ませた部分もあるけれど、その穏やかさのお蔭で狂わずに済んでいるのもまた事実なのかもしれない。
僕は騙されたくもない。
それに、飼われたくもない。
もし、僕が遊ばれているのだとしたら早々と抜け出たいと思っている。
監禁されているわけでも、弱みを握られているわけでもないのに何故か僕が何も動けないのは　今や妻である理恵を失くしてしまいたくないから。
つまり、理恵がとても大事な存在になっているということなのか。
「なぁ、理恵」
傍らで息を整える彼女を見ると、もう眠りに落ちそうな心地でいる。
「どうしました、直也さん？あ、もう眠いので話の途中で寝たらごめんなさい」
「いや、なんでもないよ」
「そうですか。なら、先におやすみなさい」
理恵はそう言うなり瞼を閉じ、寝息を漏らす。
おやすみ、理恵。

次の日、理恵はいつもの穏やかな表情で部屋にいた。出かけたりもしたが買い物程度で、行動はいたって普通の女性と変わらない。
僕の生活も、不自由な左足以外は普通の男性と変わらない。美しい理恵と共に食事を摂り、抱き合った。
でもやはり２２時になると家を出て桜木の元へと行く。

どうして理恵は仕事で桜木の所へ行かなければならないのか。
嫉妬が先立つが、理恵に面倒をみてもらっている僕は、仕事中の理恵は外見だけがそっくりの別人なのだと、考えることにした。
僕が必要としている、穏やかな顔の理恵は２２時から０時には存在しない。
感情も何も無く、ただそこにあるだけの表情を形作る事のない目元や口元などを僕は愛したことはない。
この二時間というのは僕の自由時間であり、理恵という緩やかな縛りから自分を解き放つことが出来る時間なのだ。
無表情の女や不気味な男を相手にして、もしくはつけ回して徒労に終わらせるためにある時間ではない。
走るのもいい、筋力トレーニングも悪くない、好きな勉強をするのもいい機会かもしれない。
２時間も余っているのに、したいことはそれなりにあるというのに、僕は何もしなかった。
僕はこの時間に本当に何もしなかった。
つまり、自ら望んでも理恵のように感情をなくしたようにはなれないから、ボーっとしていた。

望んで囚われてしまうのは愚か者のすることだと教えられてきた。
常に行動するのが良い事だと。
でも、今の僕はきっと囚われたいのだろう。
そして、別の部分では何らかの変化を待ってもいた。
あくまで、他力本願で、僕自身は何もしないで。
こう思ってしまうことは諦めなのか、それとも悟りの一つにでも至ったのか。
どちらでも構わない。
０時になるのをひたすらに待つ。僕は玄関に真っ黒なイブニングドレスを着た理恵を目に入れて、その柔らかい身体を抱きしめ、理恵から穏やかな表情で見つめられたかった。

第十一話

たった二時間を除くと、僕はとても幸せなのだと思う。
理恵の存在が消えてしまう恐怖に比べれば我慢など物の数ではなかった。
桜木という存在は気になるが、所詮シルエットと名前しか知らない存在なのだから、嫉妬以上の思いを巡らせることが出来なかった。
夫婦という括りを用意してくれた事を今更ながらにありがたく思う。
僕が続けと思う間はこの部屋で理恵と共に過ごしていたいという欲望が強くなっているためか、二時間を除いての理恵を支配しようとしている事が多くなっている気がする。
彼女は休日になると部屋にこもってインターネットで検索していろいろな情報を閲覧している。
僕の相手をしない事にとても苛々したし、理恵の常の穏やかな様子にさえ憤りを感じた。
加えて、自分に対する失望もずいぶんと増えてしまった。
どれだけ貶そうとも理恵に至らない点など無いことに気づいて、嫌悪感は殆どが自分の中を行ったり来たりする。
要はとても馬鹿らしい。
連日連夜理恵を求め続けたのは自分の無力感を埋めるためだったのだけど、他の理由もあった。
実際にどうかはよく分からないけれど、自分と同じ血が通う子供を産ませることで人は徐々に家庭に呑まれて行くのだと聞いた事がある。
何処となく馬鹿らしい話だ。
理恵との暮らしが半年以上経ったある日、　結婚して初めて、理

恵が調子を崩した。
いつも青いまでに白い肌が尋常でないほど色を失くした様になっていた。
色を失っていく理恵はあの時のようで、僕は彼女を失うのではないかと思う。
僕は左足を引き摺りながら理恵を抱きかかえた。
まだ理恵を抱きかかえるだけの筋肉は残っているようだ。
理恵をそっとソファの上において、呼吸が楽になるように顎を上げさせる。
見ることも叶わない場所へ理恵が行ってしまったらどうしようかと動揺する自分を慌てて叱咤する。
迷走する頭の中を必死に落ち着け、ゆったりとした口調を意識する。
「病院へ送った方がいいかな。それともしばらく様子を見ようか？」
「いえ、構いませんよ。ゆっくりしていたらきっと治りますから」
「自分の身体は本人が一番分かるというからね。でも、無理はいけないよ」
「ありがとうございます」
理恵は僕の前で気丈に振舞うけど、顔色は戻ってこない。
焦ってばかりで、どうする事も出来ない。
手近にあった毛布を理恵の身体にかけて、部屋へと戻った。
僕は彼女の体調が気になったが、少し眠かったので寝ることにした。
理恵も弱り目の時くらい一人でいる方が楽だろうから。
それにあんなに青い顔の理恵など見ていたくは無かった。
妻の理恵はいつも穏やかで優しい、これは変わることがあってはいけない。
僕達の生活を守るために。

第十二話

しばらく寝ていれば済むと思い、部屋でひとしきり本を読んでいるともう夕方になっていた。
カーテン越しに差し込んでくる夕陽がとても赤くなったせいで読書がはかどらない。
それに腹も空いてきた頃なのでリビングに戻ることにした。
おそらく理恵はソファでゆっくりした後、部屋に引き上げた事だろうと思う。
今日の夕飯は僕が簡単に作る事にしよう。
冷蔵庫の中身を思い出しながら、リビングへの扉を開ける。
その先にはソファに未だに横たわる理恵が見えた。
胸が上下しているのを見ると呼吸はしている。
だけど、穏やかな呼吸には程遠いような上下運動である。
「理恵、大丈夫かい」
彼女の肩を撫でながら問いかける。
「大丈夫ですよ。落ち着いたら病院にも行きますから」
薄目を開けるのが精一杯のように苦しそうな声だ。
「その時は付いて行くよ。今は部屋で休むといいよ」
ええ、とだけ呟いて理恵はリビングを出て行った。
残された僕はしばらくボーっとした後に、冷蔵庫の中身を確認する。
魚の切り身に豚肉、ソーセージにキャベツ、ネギに味噌、何故かこんなのが目に付いた。
他にも食材はあったはずなのだが、これだけしか見えていなかったので野菜と肉の味噌炒めを作る事にした。
鍋の中に野菜を入れて、炒めて、そこに味噌を入れるだけというとても簡単な料理なので両　親と同居していた頃にも良く作った。
勿論、両親が不在の時にだけど。

久しぶりに作った味噌炒めは当たり前だけど味噌の味がした。
つまり、まずくは無かったけど決して美味しいものでもなかったという事だ。
口直しに何か作れるほど器用でもないので読みかけの本を持ってくることにする。
先程は真っ赤な光に犯されていた部屋が今は青みがかった黒色で支配されていた。
作るのにも食べるのにも手間取ってしまったせいか。
自分の料理の才能の無さを嘆きつつ、放り出した本を拾い、窓とカーテンを閉めて部屋を出る。
リビングに戻ると、ソファに理恵が座っていた。
「直也さん、電気のつけっぱなしはいけませんよ」
「あ、ごめん。でも、体調は良いのかな？」
理恵は少し青白くなっている顔で微笑んだ。

翌日、いつもよりも遅く起きた。
一日三食を譲らない理恵にしては珍しい事なので、不安に眠気はじわじわと消えていき、僕は急ぎ足でまずはリビングへ入った。
いつも食事に使うテーブルにメモ書きが一枚置かれている。
『ご飯は炊飯器に、お味噌汁は鍋に、他に足りなければ冷蔵庫から何か食べてください。私は病院に行ってきます。直也さんはあまりに気持ち良さそうなので起こせませんでした』
確かに起きた時の時刻は１０時半だった上に、この家からそれなりに大きな病院へは直ぐとはいかない距離がある。
昨日の約束に対する言い訳もされたことなので、怒る気も起きずに、とりあえず鍋に火をかけることにした。
僕が作るわけでもない昼食を気にしだしたころに、鍵が挿入される音、ついで回される音、人の足音がした。

彼女を迎えようとリビングの扉を開けると理恵は買い物袋を下げていた。
その袋を半ば奪い取るようにしてテーブルの上に置く。
「おかえり、病院って書いてあったけど何か言われた」
「いえ、悪い事は何も言われませんでしたよ」
「それは良かった。他に医者は何か？」
「くれぐれも安静にする事だと。もう、私一人だけの身体ではありませんからね」
え、とも言うことすら出来ずに口だけを開けて理恵を眺めていた。
「お医者様が言うには、私は妊娠しているそうです」
内容を理解するにはまだ程遠い状態だ。
でも理恵の表情が楽しそうなので安心することにする。
けれど、唖然とした表情は拭い切れなかったようで、理恵が教え諭すような声になる。
「勿論、直也さんとの子供ですよ」

第十三話

理恵の薄いお腹の中にはおそらく僕に似た子供が居ついていると彼女は言う。
初めは僕も理解できなかった。
いつもは理性的で穏やかな理恵がおかしくなったのかとも疑ってしまった。
もしかすると、僕は理恵の中に他の命が宿る事を認めたくないのかもしれない。
ずっとなんて思って無かったけど、あと数年は理恵と二人っきりで少し虚しいようなそれでいて一緒にいられる生活を送れると思っていた。
だから、理恵から告げられたことは僕にとってそんなに喜ばしい事ではなく、生活への闖入者が現れたと思うような苛立たしさも感じてしまう。

「貴方の子供なんですよ」
そう言った理恵の顔は穏やかな嬉しさに浸っているようであった。
「私ね、この子の成長を見守りながら直也さんと一緒に過ごしていきたいんです。二人っきりも良いですけど、三人だとさらに楽しくなりそうな気もするんです」
僕はあまり楽しそうとは思えなかったけど、理恵のあまりに嬉しそうな雰囲気に何も言う事が出来ずに頷いた。

理恵は病院に行って、医者から正式に妊娠を告げられたと言った。
その時の理恵の顔はやはり嬉しそうで、何故か僕も嬉しく思った。
このまま理恵がずっと嬉しそうな顔をしてくれればと期待したのだが、２２時からの二時間は子供がいるいないに関わらず理恵は表情の無い顔になっていた。

それにあの影、桜木のことはいつまでも僕の中で消化し切れない存在となっている。
挙句の果てには玄関先まで出向いてきてはちょっとした段差にまで気を付け理恵に手を出し気遣うそぶりを見せていた。
僕が寝ているものと思い込んでいるのか、まるでその影は二人しかいないように振舞う。
マンションの前にならともかくそこまで足を踏み入れるとはなんて無神経な男なのか。
憤るよりも先に感心してしまうほどだった。
それに引き換え、見つからないようにと物陰から眺めていた僕はかなり惨めな気持ちを感じる。

それなのに僕は表情の無い理恵には何も言えなかったし、姿さえも隠してた。
あの理恵の様な存在に何かしてしまったら、もうこの生活がなくなることを本能的に知っていたからだろうか。
だから僕は、いつも穏やかに振舞う理恵に対して強気に要求する事にした。
彼女の休職と僕の復職を。

第十四話

僕が彼女に教えられた条件の最たるものが２２時からの二時間は決して干渉しない事。
そして、彼女の仕事について口出しをしないことであった。
この条件を覚えていたからこそ僕は理恵と暮らしていけるのだろうと思う。
それでも、後者は桜木の存在と相まって非常に不愉快な条件となっている。
前者に関しては特に興味を留めることもない条件なのだと思っていたのだが、とある変化により後者よりもややこしい条件となった。
そして、良く考えると前者と後者は似通っている。
理恵は桜木のことを仕事仲間だと言っていたようなきがするから、間違いはない。
妊娠したのなら、理恵は休むべきだ。

「仕事は続けるのか？どんどん子供も大きくなるのだろうから」
理恵のお腹が少し目立ち始めてきた時分にやっと言葉にすることが出来た。
「少しくらいは休めないのか？」
「いえ、休みたくないんですよ。やめてしまっては大切なものを失ってしまうことになりますから」
いつもどおりの穏やかな声、だけど明確な否定の意味もこもっていた。

彼女がいいえと言うことは、まず覆らないのだと数ヶ月の結婚生活で嫌というほど知った。
食事をインスタントで済まそうとすると彼女はしつこく食い下がったこともある。

「確かに便利ですが、どうしてインスタント食品などを。私は直也さんの妻なんですよ。私を置物のように扱いたいのですか？」
理恵が珍しく険のある言い方をしていたのが印象的だった。
彼女の沽券に関わる事を言ってはいけないのだとそのとき学習した。

僕も自分の沽券の為に譲りたくはないことがある。
あの桜木が、理恵のお腹をゆっくりと撫でていたのだ。僕の体中の血がざわめき怒りの余りに頭の血管が切れそうになった。
盗み見している自分を情けないと思う気持ちもそのときだけは無くなり、思わず桜木に殴りかかりそうになった。
肌寒いと思っていたのが消えて、血が沸騰しているように体が熱い。
桜木に向かって走ろうとするも足がもつれて、また走ろうとして動悸が激しくなって立ち止まる。
運動不足か、それとも本当に血管が沸騰でもしているのか。
なんにせよ、情けない。

部屋に戻るなり、まずはベッドのシーツを踏んだ。
枕を殴った。
マットを蹴った。
少し怖くなりながらも壁を殴りつけた。
僕の非力のせいか壊れなかった。
物に当たるのにもびくびくしている自分がとても情けなく感じる。
なので、ベッドにもぐる事にした。
もう現実逃避をしたところで責めてくれる人もいない気がした。

第十五話

「おはようございます、直也さん。これ以上寝ていると頭が痛くなってしまいますよ」
頭痛の種ならばもう数え切れないほど抱えている。
そう言ったところで彼女は気を揉むだけで何を言う事も無く静かに部屋を出て行くだけだろう。
その後に見ていないところで顔を歪めることもあるかもしれない。
なんにせよ、起きてしまった事だから仕方が無い。
薄目を開けてみると、映るのは穏やかな顔の理恵。
「おはよう。もう何時になったのかな？」
「おはようございます。もう１０時になりました。朝食を摂るのにも中途半端な時間になってしまいましたよ」
「ごめんね。昼はちゃんと食べるから」
「いけません。一日三食が健康の基本なんです。だから、おにぎりを用意しておきました。　これなら食べれるでしょう」
理恵はこと食事に関して自分の意見を持っている。
僕を丸々太らせて食べようというのではなしに、不思議なものだ。
「分かったよ。いただくことにする」
返事が気に入ったのか理恵が微笑んだ。

おにぎりを食べた後だというのに１３時にはスパゲティを食べる事に決まった。
１時間以上前からキッチンの前に立ち理恵は楽しそうな顔をしている。
僕は昨日の惨めな夜のうちに考え決心をした。
休職と僕の復職については、ある程度まで固まってから話し出すことにしようと。

だから今は考えない事にする。
「直也さん、塩味がつよいほうが好きですか？」
「いや、薄味の方が好きだよ」
途端、安堵したような顔になる。
「私も濃い味が苦手です。好みが同じで良かった」
最近になってやっと分かった事がある。
彼女の穏やかな顔は心情を表しているのではなくそういう顔の形なのだと。
それと、楽しそうなときは顔よりもむしろ声音の方に変化が出るということも。
なので理恵の機嫌が気になるときは、こちらから話しかけることにしようと決めた。

今日も22時から理恵はいなくなる。
あの影と共に何処かへ行ってしまう。
だから、僕も僕でなくなってしまおうと思った。
ソファを蹴り、本を片っ端から破り捨て、要らなくなった服を切り裂いた。
壊れてもあまり気にしないものばかりなのは、僕自身の臆病心からなのだろう。
本当に、情けない。
たまりこんだ不満を外に出そうとしても所詮、この有様。
いっそこのまま溜め込んで気でも狂ってやろうかと思い出す始末。
どこか冷静なまま、自分はまだ大丈夫な気もした。
なぜなら、一つの事を思い出せたからだ。
桜木が理恵に差し出した、白い手紙。
それを見つければ何かが判るような気がした。

0時になると普段の理恵に戻るのは今までに分かっている。
「おかえり、理恵」

「ただいまです。眠れないのですか？」
ちょっとびっくりした様子でそれでも穏やかなまま僕を気遣おうとする。
「たまには遅いのも悪くないかなってね」
「そう、ですか。でも、深酒なんてしてはいけませんよ」
顔を近づけて臭いを確かめられる。
「まだ飲んではいないよ。それよりも聞きたいことがあるんだ？」
「あまり長い話はお付き合いできませんけど。なんでしょうか？」
「仕事で使う白い手紙は、一体何なのかな？」
一瞬、警戒した目つきになる。
「仕事の話はしたくありません。それに知ったところで不幸になってしまうだけです」
不幸になるのは嫌だ。
「もう、寝ましょう。睡眠はしっかりとらないといけません」
そうだね。
理恵は正しい。
「僕はもう少し起きているよ」
だけど、正しい事だけではとても気分が悪い事もあるんだ。

第十六話

目覚ましの音が耳元でけたたましく鳴り響いている。
最近はもっぱら自分で起きたり、時には理恵に起こしてもらったりで目覚まし時計をセットすることがなかった。
自分で起きられるという事は相当健康的な生活を送っていることに今更ながら気づく。
足の調子も決して悪くは無いので、近いうちにジョギングでもしようかとも考えているほどだ。
目を開け、頭をめぐらして文字板を見つめると、そこには6時45分とあった。
何もしなくてもいい僕の生活にとっては起きるのに早すぎる時間で、あと一時間ほど眠れる。
僕は目覚まし時計をとめることなく、再び眠ることにした。

眠るために目を閉じた僕は、薄れていく意識の中で分かった事がある。
先程起きていたときには聞こえていた鳥のさえずりが聞こえず、窓から差し込む日の光が朝のそれとは違って強い。
時計の文字板を見やると、11時23分と表示されていた。
ほんの1時間程度だったのが、どうも寝坊をしてしまったのかな。
でも、いつも起こしてくれる理恵がいないのはどういうことなのだろう。
僕があまりにも起きないので、理恵が呆れてしまったとも考えられるが、もしかすると、理恵が寝ている可能性もある。
自分でも笑ってしまうような想像をしながら僕は理恵の部屋の前に立った。
ノックを二回するも、反応が無い。
「おはよう。いないのか？」

しばらく待ってみるも返事はない。
仕方なくリビングへと向かう扉を開け、喉が渇いていることを今更ながら自覚し冷蔵庫の方へ足を向ける。
すると、一枚のメモが目に入った。
「少し出かけてきます。朝食は温め直して食べてください」
筆跡は理恵のもので間違いない。
温めなおすというのはジャーにあるご飯とコンロにかけてある味噌汁のことだろう。
理恵の食事に関する几帳面さは少し感心してしまうほどだ。

鍋を火にかけながら、ぼーっとしていると疑問が浮かんだ。
いつも二人で朝食は摂っていたのにどうして今日は何も言わずに外へ出て行ったのか。
どことなく腑に落ちない。
朝食兼昼食を摂りつつ、今日は散歩でもしようかと漠然と思っていると、もっと重要な事があることに気づく。
２２時からの理恵のこととあの忌々しい桜木についてのことを知られずに調べる機会ではないのか、と。
けど、それは理恵との条件を破る事になってしまう。
夫婦なのだから、守るべきことは守らなくては理恵と一緒にいれなくなってしまう。
分かっている、守ることは必ず正しい事だ。
それでも、僕にとっては正しいだけが全てではない。

少しだけ間をおくために散歩をしながらさらに考える。
隣町との境にあるコンビにまで来たら引き返すとしよう。
もし、帰っても理恵がいなければ少しだけ部屋に入ってざっと見渡すだけ、そうする。
理恵が帰ってきていれば何も考えなくて良い。
僕は目に入ったコンビニで缶コーヒーを二本買って、今夜のため

に備える。
彼女が帰ってきていれば楽しく二人で飲むことも出来る。
うん、そうなればいい。
出来るだけ歩調をゆっくりする事にした。

第十七話

エントランスの呼び出し口から自分の部屋に繋いでみる。
「ただいま、戻ったよ」
耳を澄ますとスリッパの乾いた音が近づいてくる。
そして、
「お帰りなさい、直也さん。お散歩にでも行ってらしたのですか」
僕が不審な行動をとった後だというのに、理恵の声音はいつもどおりだった。
やはり、ただ僕が良く寝てただけではないのだろうか。
だとすればとても安心が出来るのだけれど、やはり信じきるのは早計だと思う。
「たまには運動しないといけないからね」

鍵を挿し入れ、中に入るや靴を確認する。
いつも理恵が好んで履いていく靴が並んでいた。
確かに彼女は帰ってきているらしいとやっと安心が出来た。
どうして僕は家に帰ってくるだけでこんなに面倒臭い事をせねばならないのか自分でも不思議に思う。
「ただいま、理恵」
「おかえりなさい。疲れませんでしたか？」
「この程度では疲れないよ。で、どうかな。缶コーヒーは好き？」
理恵が不思議そうな顔をする。
「嫌いだったかな」
家で作れば良いと言うのにわざわざ買ってきたのは失敗だったか。
「いえ、こういうの初めてな気がしまして。なんだか、不思議な気分なんです」
確かに彼女のこんな顔は初めて見たような気がする。
「多分、嬉しいのだと思います。ありがとうございます、直也さ

ん」
少し体温が高くなったのを感じた。
時刻は２２時１２分。
理恵が出て行くまでに息を潜めるつもりが散歩をしたからか本当に寝てしまっていた。
やはりこの時間では理恵はいないし、彼女のお気に入りの黒のパンプスもない。
僕はこっそりと理恵の部屋へと向かう。
此処に引っ越してくる取り決めの一つに鍵を取り付けないというのがあった。
つまり、互いを信頼しようという事だ。
その信頼を破ろうとも僕は見つけたいものが出来た。
いつか見た、桜木が理恵に渡した白い手紙。
それが見つかれば何かが解決しそうな気がしたから。

机にもカバンにも箪笥にもない。
あの理恵のことだから分かりやすいところに保管していると思ったのだけど違ったようだ。
もしかして、僕がこうすると知っていたのだろうか。
そんなに信頼されていなかったのか、僕は。
そんなに僕に見られてはいけないものなのか、あの手紙は。
僕より桜木のほうが信頼できるとでも言うのだろうか。
自分が情けない事も忘れて理恵を責める事だけが浮かんでくる。
すると、頭がぼうっとして少しの間、意識が飛んだような気がした時。
箪笥が思いっきり倒れた。
自分の手を見ると、この手で倒したのかと遅れて理解する。
しかし、どうしてそんなことを。
混乱する頭を持て余し気味になっていても、それでも僕は見つけ

てしまった。
おそらく箪笥の裏にあった、、埃が一つもついていない白い手紙を。

第十八話

手紙を読もうと思えばその場でその時に出来たはず。
それなのに僕はリビングのソファに深くもたれかかっている。
手紙は理恵の部屋の机の上に置いておいた。
破り捨てて読もうとしなかったのはせめてもの僕の矜持と言ってしまうと格好良すぎる。
結局、僕は臆したということなのだろう。
約束とか、守るべきラインとかではなくて、ただ臆病風に吹かれただけなのだ。
ますます自分が情けない。

鍵が差し込まれ捻られる音がする。
ソファでうとうとしてしまっていたのを急いで起きる。
扉の開閉音、靴を脱ぐ音、裸足で床を歩いてくる音、リビングの扉のノブを回す音。
そして、扉が開かれる。
「おかえり、理恵」
時刻は２３時５９分。
彼女の返事は無い。
しばらく理恵を見つめ続ける。
表情の無い、顔のパーツでさえも感情を忘れたような顔をしている。
初めて見るわけではないけれど、本当にぞっとしてしまう。
その顔は生きている人間の顔と言うよりも死体の顔のように思える。
声をかけてよいのか、分からない。
果たして、返ってくる声が理恵の声なのかも。

突然、我に返ったようになり、穏やかな声を出す。
「ただいま、直也さん」
穏やかな理恵が目の前にいた。
時刻は0時0分。
「いきなりだけど、ごめん。勝手に君の部屋に入った」
うつむきながらでも、理恵が息を呑むのが分かった。
「良くないですね。夫婦でも守ることは守ってください」
珍しい事に声にイラつきすら感じる。
少し怖いけれど、言うべきことは言わないといけない。
「それと、白い手紙を勝手に見つけた」
顔を上げて理恵を見ると、目を閉じて何かに耐えているような表情だった。
「その手紙をどうしましたか？」
「君の部屋の机の上。さすがに読んでいないよ」
読んでいないことを聞いたためか、理恵の顔の緊張がほぐれ声にも余裕が戻った。
「そう、それは良かったですね。条件を忘れてはいけません」
分かっているよ、そう呟くのが精一杯だった。

「もう触ってはいけませんよ。勿論探すのもいけません」
僕はただただうなだれていた。
理恵が言葉でたしなめる程度で済ませてくれたことが反対にとても怖かったのだ。
もし、下手に口を開けば、理恵が出て行ってしまうような気もしていた。
だけど、この手紙の事を気にしないことは絶対に出来ないだろうとも思う。
「本当にごめん。おやすみ、理恵」
「もういいですよ。おやすみなさい」
お互いの部屋へと引き上げる。

彼女は手紙を新たな隠し場所へと隠し、僕は気になって仕方がない状態でベッドに入る。

どれだけ、眠れないと思っていても目は閉じ、朝は来る。

「おはようございます、直也さん」

第十九話

今日もまたいつものように理恵が起こしてくれた。
情けないような嬉しいような、朝に気分が悪くなる事が減ったのはあの穏やかな声に起こしてもらえるからなのだろうか。
「おはよう。いい天気だね」
「そうですね。洗濯物が直ぐ乾いてとても良い天気です」
確かに、日差しも強く気温も高そうだ。
しかし、乾いて、ということはつまり。
「もう昼か」
それを聞いて理恵は少しだけ呆れた表情を浮かべた。
「最近、よくお休みになっているのは良い事ですが、寝すぎは良くありません」
「でも、朝は食べないといけないのかな」
「勿論です」
おにぎりが用意してあります、とにこやかに言った。

おにぎり二つを食べさせられ、その二時間後には野菜炒めを食べる事となった。
僕が量が多いね、と言うと理恵は目線だけをこちらに注いできた。
「じっと見ていて何か怖いんだけど」
「直也さんがもっと早くに起きていれば一緒に朝ごはんも食べれましたし、昼ごはんも美味しくいただけたんですよ」
言い訳は無駄だと悟り、頭だけを下げた。
「これからはちゃんと早く起きます」
「当然です」
珍しく冷ややかな声であった。

食器の後片付けを僕に頼んで、理恵は食材を買いに出かけた。
この間に僕はとてもゆっくりしてきたのだが、今日は少し違う。
今日もまた理恵を裏切る事をしなくてはならない。
僕は理恵の部屋に入ると、今度は丁寧に物色を始める。
箪笥の裏や、机の下などには無い。
ならばと、クローゼットや天上まで探ってみるが、これまた結果は同じであった。
最後に前に理恵の手紙をそこに置いた机が残る。
唯一探していないのはその引き出しの中、しかし、こんな鍵の無いひきだしの中に重要な手　紙を入れているというのだろうか。
もし、入れているのだとしたらそれは僕への信頼か、または皮肉なのか。
一段目のひきだしの中身を見て、思わず体が震え、涙が出そうになった。
ひきだしのそこには真っ白な手紙が本当に無防備に置かれていたから。

第二十話

僕はこのときだけ理恵を裏切る。
それはもう決めたことだし、変える気はさらさらない。
けど、まだだ。
この手紙を理恵の前に引き出すのは０時以降でなくてはいけない。
あの桜木と会った後の理恵にしか手紙を見せる価値は無い気がする。
理恵が何を思って、この引き出しに手紙をしまったかは今は気にするべきではない。
僕はこれを幸運に思わなくてはいけないのだというのに、どうしてかこの時ばかりは彼女の　穏やかさを責めるような言葉が浮かんだ。
本当に愚かだと思う。
信用はほどほどにしなければいけないとも思う。
しかし、本当に考えねばならなかったのは。
感情的になり自分自身をも貶めたのが可笑しくて声を立てて笑った。
漫画のような笑いを出したくなったが、実際にハハハと言えたかどうかは分からない。
なるほど、僕は自分自身の尊厳さえ踏みにじったと言う事なのか。
まったくふざけている。

本当に久しぶりにベッドの横に転がっていた本を読んでいると、呼び鈴が聞こえる。
リビングにあるインターフォンを取ると、目の前の画面に大きなスーパーの袋が映った。
「ただいま、戻りました。開けていただけますか？」
「あ、うん。わかった」

しかし、なんだというのだろうあの袋の多さと大きさは。
食べすぎが身体に悪い事は良く知っているだろうに、不思議だ。
エレベーターが僕たちが住む階に辿り着く頃合を測って扉を開けて、エレベーターホールへと視線を移す。

重そうな荷物を一杯に抱えてよたよたと歩く理恵が見て取れた。
「持つよ。お腹に悪いだろ」
言っても渡さないのは分かっているのでまず、荷物を奪ってから言う。
「母親らしさが必要な時期らしいから」
「あれ、では直也さんは十分に父親らしくなってしまわれているのですか？」
いや、と否定しようとすると。
「だったら、とても嬉しいです」
それが本当にうれしそうだったので、大人しく口を噤んだ。

「で、その量の多さは何事かな？」
部屋に入るなり聞いてみる。
「普通の量じゃないのは、僕でも分かる」
「お祝いですよ。お腹の子の」
妊娠祝いはこの前したし、ほかにも記念日があったのだろうか。
本当に覚えが無い。
覚えが無いと言う事はそんな日は無いということなのではないか。
それとも単純に僕が度忘れしてしまったのだろうか。
だとすれば、一体どう取り繕えば良いのだろう。
「普通に買い物をしようと思っていたら、お腹の中の子供が蹴ったんです」
「え、何を」
「私のお腹に決まってます。それが何故だかとても嬉しくて。私と直也さんとこの子で家族を作れるんだなと思うと、お祝いをした

くなったんです」
「そう、なのか。赤ちゃんって蹴るものなのか？」
「自分の存在を主張しているって言う人もいますよ」
お腹の子が今日、自分の存在を認知して母親に知らせたと言う事なのだろうか。
なんだか、不吉な気がして余り素直に喜べないのが本当のところだ。
なぁ、と声をかけようとして理恵のほうを向くと、喉からは声が出なかった。
自分のお腹を愛しげに撫でて小声で何かを語りかけるよう理恵が、僕とっては遠い存在のようで、少し寂しく、しかし、見たことが無いほど美しかった。

第二十一話

夕食には珍しく肉料理ばかりを食べた。
から揚げに手羽先の揚げ物、牛のステーキに豚トロ。
飲み物はいつものお茶ではなく、コーラやスプライトといった炭酸飲料。
理恵がこんなものを買ってきたことは勿論驚くことだったのだが、それ以上に驚いた。
いつも穏やかで大口を開けて何かをしたところを見たことが無い理恵が正しく一口で中々の　大きさがあるから揚げを食べたり、手羽先にむしゃぶりついていたりしたのだから。
「お腹が空いていたのか。ごめん、そうは見えなかったんだけど」
彼女は両手で押さえるようにしていた手羽先から口を離す。
脂が唇についていて、それは赤い舌に舐め取られる。
思わず動悸が激しくなる。
「私、こういうのも嫌いじゃありません。子供がお腹にいるときくらい食べてもいいんです」
「食べすぎは毒なんだよ。ちゃんと分かってるかい？」
返事の変わりに理恵は大きく首を縦に動かした。

「ごちそうさまでした」
食べるている時に片づけを思い出すと憂鬱になると聞く。
今日の皿洗いは僕だったのを思い出して、本当に憂鬱になった。
結局、僕も肉を半分くらい平らげたので理恵は思ったよりも苦しそうではなかった。
今はソファで横になっているが、食べすぎのせいではないと言い張ってる。
「私だってまだ若いんですから。食べすぎくらいでしんどくなったりしません」

「嘘だなんて、言ってないよ。だけどね」
言葉が不自然に途切れたので理恵が不思議そうな顔をする。
そんな顔を見ながらソファの側へと寄っていき、お腹をつついてみた。
「うぐっ」
喉の奥の方で詰まったような声が聞こえたと思えば、理恵の瞳に涙が溜まっていた。
そして、無言でそっぽを向いた。
「あの、理恵？」
最後まで言い切るより先に
「知りません」
理恵がかぶせてきた。
「ごめん」
「知りません」
僕はうなだれるしかすることが出来なかった。

なんの感動も無いままにいつものように２２時は来る。
理恵は数時間前に拗ねていた事は忘れたかのように２２時になるとすぐさま黒のドレスに着替えて外に出かける。
ドアを出てからがちゃん、という音をさせるのもいつものことだ。
僕は身を潜めつつも理恵を見送り、理恵の部屋へと忍び込む。
昼と変わらず、一番上の引き出しの中に白い手紙がある。
仕方が無い。
情けないことに、僕は必ず理恵を裏切らなければいけなくなった。

第二十二話

手紙を持つ、だけど今この場で開くのはいけない。
理恵の目の前で開いて見せることにこそ裏切りの意味がある。
だから、読みたいと思うのも耐えなくてはいけない。
共に暮らしだしてから感じてきた理不尽さも虚しさも全て理恵に叩きつける形で為さなければいけない。
そこまで考えが及んで引っ掛かりを感じた。
僕はそんなに不幸だったのだろうか。
裏切らねばならぬほど理恵に不当な扱いをされただろうか。
この裏切りは正当な行為なのだろうか。
幾度となく考えたことなのに、この期に及んでまだ白い手紙も何も無かった事にしようという考えが鎌首をもたげてきたのがやや不思議に思える。
もう、止められはしないだろうし、止めたくもないというのだから。

光に透かしてみても紙が厚いのか、そういう質なのか全く中身が確認できない。
持ってみただけだと、それほど重くは無い。
厚さもそれほどないのでせいぜい紙が数枚入っているだけだろうとも思う。
改めて見てもなんてことはない。
本当にタダの紙切れにすぎないじゃないか。
もしかしたら、この紙切れ程度では僕が思う何かなんて起こりはしないのではないか。
「くだらない」
僕は手紙をテーブルの上に放り出し、１２時まで何をしようかソファに寝転がって考える事にした。

ぼーっとしていれば眠くなってしまうので、寝ても少しだけと思っていたのだけれど、寝て　しまえばそのようなことは関係がなくなるのをすっかり失念してしまっていた。
気づかないうちに、僕はゆるやかな眠気に負けてしまっていた。
最後に視線の中にあった時計が指していた時刻は
２２時２３分。

夢を見た気がする。
けれど、忘れてしまった。
楽しかった気がするがとても残念に思えて仕方が無い。
ところで、いったい今は何時だというのか。
慌てて目を覚まし、時計に視線をやると
２３時５２分
となっていた。
まさか、１時間以上も寝てしまうとは全く考えが及ばなかった。
自分でこれから何をするか分かっているのか。
頭の中で言葉がぐるんぐるんと回っていて気分が悪い。
少し目を閉じる。
頭はまだぐるぐるして、吐き気もこみ上げているがゆっくりと深呼吸すればやりきれないこと　もない。
しばらくそうしていた。
扉が開く音が聞こえてくるまでは。
「ついにか」
溜息を一つついて、ソファから起き上がり、理恵を迎えに玄関へと向かった。

第二十三話

「お帰り、理恵」
美しい能面のような顔に向けて言う。
当然、その表情がお帰りなどと言うためにゆがむわけは無い。
理恵は僕を無視して、靴を脱ぎリビングへと入っていく。
僕は後ろにつくようにして戻る。
リビングの時計は２３時５８分となっていた。
あと、二分でいつもの理恵に戻る。
何よりも有り難いことだったが、今に限ってはかなり胸がいたくなってしまう。
せめて、裏切る間だけは何も無い理恵でいてはくれないだろうか。
「話がある。手紙についてなんだけど」
手紙という言葉で能面がこちらへと向けられた。
そして、視線をテーブルへと移して、白い手紙をじっと見つめる。
しばらくしてその視線は僕にも向けられる。
「そう、ですか。そうなってしまいました」
顔は能面のままなのに、声は常の理恵の穏やかな声になっていた。
時計を確認すると、０時と見えた。
「読んでるなんてことはありませんよね」
どうして、２時間で理恵は元に戻るはずなのに。
僕が約束を違えたからだというのだろうか。
そうせざるを得なくしたのは理恵だというのに。
「読んではいけないのか？」
口を開けずに発したために思うよりも低い声が漏れた。
理恵が少し驚いたように目じりを上げる。
「いけません。だから、早く返していただけませんか？」
そう言いながらテーブルの上へと手を延ばす。
「嫌だ」

言葉と一緒に先に手を延ばす。
そして、手紙を掴みあげてみせる。
「その手紙を持っていてもなにもありません。それに読んではいけないんです。直也さんに　とって良くない事が起こるだけです」
そんなに見せたくないと言うのだろうか、この程度の薄っぺらいものを。
「どうしても嫌なんだ。理恵が隠そうとすればするほど、僕はそれを見なければいけなくなる」
「どうしてですか」
穏やか声は遠く、今や嗚咽が聞こえているような気がする。
それでも、僕は手紙の封を切った。
中には一枚の紙。
「僕が理恵も子供も養っていく。その為に必要なんだよ」
紙切れを広げて僕は書かれている文字を読み上げた。

「かみはしなおや。これは僕の名前。どうして？」
どうして、僕の名前が。
僕の名前だけが書かれているのか。
救いを求める気持ちで理恵を見やると、小刻みに震えながら下を向き何かぶつぶつと呟いている。
「なぁ、どうしてなんだ。理恵、君なら分かるんじゃないのか？」
理恵は何も反応を返そうとしない。
ただ、自分の世界だけにこもっているように見える。
僕がなぁ、と呼びかけ続けるのも拒んで、ぶつぶつと怪しいまでに口を震わせる。
せめて、何かに触れていたくて理恵に近づくとやっとその呟きを聞き取る事ができた。
「もうだめ。もうだめ。もうだめ。もうだめ。もうだめ。もうだめ。」
声は絶望に打ちひしがれたようなのに、顔はまるで能面のような

ままだった。

第二十四話

これまでの生活で理恵が荒れる時がなかったわけではない。
なので、多少怒られて最悪殴られたりしたところで覚悟は出来ていたと思う。
だけど、理恵が壊れてしまう事は全くの予想外だった。
僕は声を発したつもりになっていたけれど実際には何も言えてなかったのかもしれない。
果たして謝罪の言葉すら言えていたかも怪しい。
僕が覚えているのは理恵がふらふらと立ち上がり、おぼつかない足取りで玄関へと向かいだしたのを止めた言葉だけ。
確か、待てと一言だけだったような気がする。
その言葉で彼女が止まる事は無かった。
それに、今更だが待てと言う暇があるのなら追いかけて止めればよかったのではないか、要は僕が腰抜けだと言う事なのだろう。
しかし、腰抜けなりに意地だけは他人以上に持っているつもりだ。
僕はやっと玄関を抜けてエレベーターに乗り、エントランスを抜けた。
出た先は電灯が照らす部分だけが明るく、そこに理恵の姿は認められない。
何処へ行けばよいのか全く当ても無く、目に付いた街灯の方へと吸い寄せられていった。
近づいて見てみれば、その明かりが照らす境界より外側に大きな影が立っていた。
いきなりの光景に足が竦んでしまった。
まさか、理恵との和解も出来ないままに襲われて死ぬかもしれないなんて、情けないにもほどがある。
足は強く思おうとすればするほど震えてしまう。
声だけは幸いながら出るようだ。

「何もするなよ。危害を加えたら警察を呼ぶぞ」
影は何も答えない。
僕も足を動かせないので口しか動かせない。
「聞こえているのか。なら、はやく行け」
「うるさい、聞こえている」
怒ったような声は間違いなく影が発したもので、驚いてしまった。
影はすぐにどこかへ行くとも思っていたし、なによりも耳に届くその低音があまりにも綺麗だったから。
「お前は何だ？」
ついには言葉すら震えながらも質問をする。
「理恵から聞いているだろ」
こんな影の男の話など、記憶にあるのか、必死で探ってみる。
「桜木」
僕が必死で思い出しているというのに不躾に言葉をかぶせてくる。
しかも、こいつがあの桜木だと。
「上橋直也。お前は消える前に理由を聞きたいか、聞きたくないか」
「理由って何の？」
「聞きたいかどうかを聞いている」
桜木の低音は荒くならない。
それなのに、気圧されてしまうのは何故なのか。
「なら、聞こうじゃないか」
不本意ながらも僕は答えてしまった。

第二十五話

言ってすぐに息を漏らす音が聞こえた。
僕ではない、つまり桜木が漏らしたと言う事になる。
その音が僕を嘲笑しているように聞こえ、声を荒げてしまう。
「何かおかしいのか？」
「いや、おかしいとは違う。むしろ、哀れだと言った方が良い」
こいつにそんなことを言われるほどに情けない格好をしているのだろうか。
そういえば、着のみ着のままで外に出たことを今更に思い出す。
「お前じゃない。理恵の方だ」
「お前に何が分かる」
「俺はほとんど分かっている。だから、教えてやると言っている」
「じゃあ早く教えろ」
影からではあるけれど桜木が呆れたような顔をしているのが分かった。
「だということだ。お前から言うか」
この話しぶりは僕以外の第三者へのもの、おそらくこの状況で桜木の近くにいるのは一人しかいない。
「理恵か？」
「そうです、直也さん」
返ってきた声は確かに彼女のものだった。
「なぁ、もう帰らないか？」
桜木が鼻を鳴らした。
僕は無視して続ける。
「君の規則は良く分かったつもりでいる。この男が仕事相手だと言うのなら仕方の無い事だと思う。だから、一緒に帰ってくれないか」
言葉が届いてくれたのか、理恵の姿が街灯に浮かび上がる。

理恵の手を掴もうと僕は手を差し出す。
しかし、彼女の手は微動だにせず、動いているのは口だけだった。
「その前に話を聞いてもらいます。私の口から、直接」
返事はしなかった。
口を挟むべきではない、それくらいは僕にも分かる。
「信じてもらえるか分かりませんが、私と桜木さんの仕事と言うのは死神です。直也さんにも想像できる通りに人を殺して生命のエネルギーを回収するという内容のものです」
何を言い出すのであろう。
死神だとか、ついに頭でも打ってしまったのか。
「さすがに僕でも信じるのが難しいよ。理恵が死神なんてあまりハッキリとはしない冗談じゃないか」
笑みまで浮かんできてしまった。
でも、それは途中で引っ込んだ。
理恵があまりに悲しそうな顔をして言葉を何も発そうとしないから。
そんな彼女を見るのは僕は初めてで、見たくない彼女の姿だった。
「本当にもう、ダメなのか。僕はもうどうしようもないのかな、なぁ、理恵」
彼女は否定をしない、頷きもしない。
「死神の仕事は死神だけのものなんです。垣間見る事さえも人にははばかられます。もしも、何らかの関わりを持ってしまったとしたら」
この先はもう分かる。
聞きたくなどは無い。
「嫌だ」
「関わってしまったら、私たちの仕事が一つ増えることになります。そして、今日中に一つこなさなくてはいけなくなってしまいました」

最終話

「ごめんなさい、直也さん。もうどうしようもないんです」
「嘘だろ。君が死神とか言うのはもちろん嘘なんだろ。どうしてそこまでふざけたことを言うんだ。手紙を見た程度で人が死ぬわけは無いんだ」
「違いますよ」
そう言う理恵の顔からは表情が消えたままで、声の抑揚まで先ほど孕んでいた悲しみと共に無くなっていった。
「人間が自発的に死ぬのではなく、私達が無理矢理に殺すのです。死刑執行人と例えれば納得していただけますか」
そんなの納得できるわけなど無い。
まともに取り合っていたらこちらもおかしくなってしまう。
「分かっているか、もう時間が無い。話は手短に」
濁りの無い低音が響く。
「僕は今、殺されるのか？」
「ええ、本当はすぐにでも殺して差し上げねばならなくてはいけないのですが、桜木さんに我儘を聞いてもらっているんです。誤解されたままで死なれるのは良くありませんから」
勘違いというと、この期に及んで僕は妻から言い訳を聞かされねばならないのか。
「分かってないと言いたいような顔ですね。この子の事も貴方の命のことも、分かってからのの方が良いはずだと思うのです」
「せめてもの同情だとでも言うのか」
「直也さんの妻としての自己満足をしておきたいのです」
僕は愛してもらっていたと自惚れても言いという事なのだろうか。
なら、少しは希望も残っているという事なのではないか。
何か返そうと口を開きかけるとまずは目で、そして口で塞がれた。
少しの間を置いただけで離れていく。

呆然としている僕をそのままに理恵は彼女の言う自己満足を始める。
「もう分かっていると思いますが、直也さんは本当は死人です。それを私が無理矢理に引き止めました。代償が私の仕事量の増加でした」
「つまり、より多くの魂を狩ったとでも言うのかな？」
「そうです。直也さんを失いたくないために働くしかありませんでした。最近は私の子供の為にも」
「どうして、子供の為に仕事を増やさないといけないんだ。僕が生きてく為というのはどうにか理解できたけど、子供は僕達の子供なのに人の魂など不要だろ？」
桜木が何らかの思惑で重労働を課しているとしか思えない。
それに私のではなく、私達の子供だと言うべきではないか。
「私は死人です、それに未熟ですが死神です。その子供もまた人とはなり得ません」
視線を僕に合わせようとするも、下を向いてしまうのか、理恵は俯き加減のままだった。
「これで不可解なことは分かっていただけましたか？」
もう嘆息しかしたくはなかった。
けれど、理恵が答えを求めるかのように見つめてくる。
「もう、分かったよ」
「直也さん。大好きです」
名前で一区切りを付けられ、それに反応して顔を上げたところに言われた。
こんな状況だというのにはにかんでしまいそうになった。
「僕もだよ、理恵」
声が届いたのか、理恵はまるで無表情に戻っていて、もう戻るような気すら失せた。
「有難う、直也さん。残念ですけどもうさよならです」
死ぬのか、こんな馬鹿げたようなことで。

ふと、思った。
どうせ死ぬのだとしたら、この世への未練を全て掘り起こしてみたい。
「止めろ。たすけてくれ」
僕はまだまだ理恵と共に暮らしたい。
さらに望めば僕達の子供と一緒にも。
僕はまだ死ねない、死にたくない。
だから、どうか。
「助けてくれ」
「もう手遅れです」
いつの間にか理恵の手に握られている何かがそこら辺の空間を黒くゆがませている。
大きく広がりながらそれが僕に向かって振り下ろされた。

一瞬でついさっきまでそこに在ったものが消え去った。
と、同時に理恵が掴むようにしていた黒い何かも消えたようだった。
それを確認すると今まで一言も発さず、動きもしなかった桜木が壁から背を離す。
「送るのは、今は無理か。では、俺が行ってくる」
うっとりするほどの澄んだ低音で言った後、桜木は暗闇へと歩を進める。
「辛くなったら、もう人間などでいようとしないことだ」
わずかに慈しむ低音が暗闇から響いくと、音は何も無くなる。
人の通りもなく、桜木が去った今は俯いている理恵を街灯が照らしているだけとなった。
その顔は無表情で、何を考えているのか悲しんでいるのかさえも全く分からない。
数刻後、おもむろに顔をあげゆっくりと理恵の住むマンションへと足を向ける。

彼の荷物も、思い出も残っているだろうに彼女の顔はやはり無表情であった。
唯一の人間であった名残はお腹の子供で、その子を手放す事はない。
死神と人間の子が人の形をしているとも限らないのだから、何も彼女の邪魔にはならない。

あとがき

白い手紙を最後までお読みいただき誠に有難うございます。
読者諸賢におかれましては楽しまれましたでしょうか。
私の作品の中で一番と言って良いほどのアクセス数を叩き出した本作には私自身も驚かされました。
前述のとおり、私にとっては異例のアクセス数の上に白い手紙は初めての共作でもありました。
更に初めての推敲なるものも行いました。
共作に推敲に重ねて長編、正直に申しますとかなり混乱いたしました。
特に推敲の際に構成を担当していただきました雪鈴さんとの間に共通の情報を持たないというのがネックでありました。
雪鈴さんの「柘榴編」のあとがきにありました通り、やはり真逆である二人が組むという事は色々と噛み合わない事もあるということなのだと今になって実感いたします。
同時にその困難から学んだ事も決して少なくはありませんでした。
改めて、執筆以外のほとんどの作業を担当してくださいました雪鈴るなさんにお礼を申し上げます。
ありがとうございます。

もう一つ、初めてのことがあります。
あとがきを書くということです。
単純に雪鈴さんの「柘榴編」の真似なのですが、恐縮ながら私は雪鈴さんほど悩んでおりませんのでそれほど書くべき事もありません。
ただ、「柘榴編」のあとがきに「しんどい思い」「なんとか無事に」という言葉を見て、そこまで苦しめてしまっていたのかと遅ればせながら理解いたしました。

心の痛いことではありますが、雪鈴さんが素敵な作品を書き上げていただいた事はとても感謝しております。
重ねて、私の途切れがちな意識を繋ぎ、投稿を終えるところまで引っ張っていただけましたことにも感謝しております。

本作、白い手紙にはいかなるテーマが潜んでいるのか、またはどのような思惑で作られた話なのか。
答えは色々用意できる事かと存じますが作者の私といたしましては喪失に関するお話だと考えております。
たった一人を失ったところで人は生きていけなくなる事はない。
関わりの無い人がどうなろうとも誰に影響を及ぼしはしない。
皆様が近しいと感じている人はご本人が消えてしまったときに果たして少しでも動揺されるのでしょうか。
少なくとも私は何も感じない人になりたくはありません。

最後に心より本作の執筆に関わっていただけました皆様と読んでいただけました皆様に感謝いたします。
また何れの機会にお目にかかれることを心待ちにしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5535f/

白い手紙

2010年10月10日00時24分発行